横浜国立大学大学院建築都市文化専攻　修了のお祝い　2020032　専攻長　大原一興

まずは、修了おめでとうございます。令和という元号になって最初の修了生ということで、心からお祝いを申し上げます。

ご存知のように、新型コロナウイルス感染防止のために、本日の挨拶は短く、かつ限られた人数だけを対象にお話しすることになりました。この状況をめぐっては、様々な意見がうずまいていますし、私たちに深く社会のあり方を考え直すきっかけを与えてくれました。みなさんは、まさしくコロナウイルスの年に修了した学年として、これからの人生で記憶に残るでしょうし、周りからも認識されるでしょう。今日はそのことに触られずにはいられません。

新型コロナウイルスで、浮かび上がってきたことをふたつ触れたいと思います。ひとつは、行動規範としての民主主義ということついて、もうひとつは、未知の脅威に屈しない科学的態度ということについてです。

ひとつめは、ドイツのメルケル首相が、先週、3 月 18 日テレビで国民に向けておこなったの演説で民主主義にふれたことが強く印象に残っています。メルケル首相は、昨日のニュースでは、その後、感染者と接触したことがわかり自宅で自主的に隔離状態にはいったひとりとして行動し今朝のニュースでは陰性結果が報じられています。

国民の行動自粛の協力を依頼する演説の中で、その深刻性を「1990 年の東西ドイツ再統合以来、いや、第 2 次世界大戦以来、ドイツにとっては、連帯の精神をもって行動することがこれほど重要な挑戦はありません」「この閉鎖措置が、私たちの生活に、そして民主主義的な自己認識にどれだけ厳しく介入するものか、私は承知しています。わが連邦共和国ではこうした制限はいまだかつてありませんでした」と。単なる「出来事」というより、ドイツという国や人びとの存在に関わる精神的に重要な事柄だと語ったと捉えることは大げさでしょうか。

「旅行および移動の自由が苦労して勝ち取った権利であるという私のようなものにとっては、このような制限は絶対的に必要な場合のみ正当化されるものです。そうしたことは民主主義社会において決して軽々しく、一時的であっても決められるべきではありません。しかし、それは今、命を救うために不可欠なのです」と根拠を命に見いだしていて「私たちは民主主義社会です。私たちは強制ではなく、知識の共有と協力によって生きています。これは歴史的な課題であり、力を合わせることでしか乗り越えられません」と。東ドイツ出身のメルケル首相にとって人一倍民主主義という言葉は重く、行動を制約するような社会の要請は、民主主義に反するものかどうか自問した末の苦悩さえ感じられる言葉でした。（かたや、日本の首相から発せられた言葉は「政府は〇〇を

決断し、実行します」「政府の立場は〇〇」などという政府を代表する者から一般市民に向けて呼びかけたもの。国民と政府の二者の対決においての弁解と自己宣伝の連発にすぎないもの）日本の首相演説とは根本的に異なり、自分自身の内面から、自分をふくめた国民一体的な任務として「民主主義」と「共に対処していこう」と、「お願い」や「協力を仰ぐ」というより「わがこと」ひとりの人間として自身の行動指針を示し、「共感」を呼びかけたのです。

またこんな感動すべきフレーズもありました、「自分とあの人たちとは関係ない、と一瞬たりとも考えないでください。誰も犠牲になってはいけない。誰もが大切にされるべきであり、私たちは一体となって努力することが必要なのです」という、誰も見捨てないこと、分断と差別ではなく連帯が民主主義精神だと語りかけました。民主主義を守るということは、現代社会を築く上で貫かれる理念です。この時、近年使われるようになった「合理的配慮」という言葉がありますが、これは人々の築きあげた共通理念に即してあらゆる社会的な努力をするということです。よって立つところは民主主義の理念、つまり苦難を他人事（ひとごと）とせず人と共に生きようという考え方に従って社会を作っていくことなのです。

ちょうど昨夜、スカイプ会議で各国の人と話をしましたが、ブラジルの人から、これまでに報道や公式なデータで知られている被害の状況をはるかに超えた悲惨な実情がファベーラ（丘陵地の貧困地域、スラム）で起きつつある、と。そのことは重大な問題だし、かつそれは invisible と話してくれました。コンピュータウイルスが脆弱性をついてくるのと同様、未知の脅威は、まさに見えにくいところの貧困を直撃するのです。今回の新型コロナウイルスによる肺炎の死亡者は病弱の人、高齢者、貧困の中にいる人々などです。ブルネラブル、フラジャイルな人々にとって、死をもたらす深刻なものです。感染しても重症になりにくい若者が、自分たちがクラスタとなることよって虚弱な人に感染させることは、その人たちを一層死に近づくよう導く行為となります。これは全く不公平な世の中です。不公平は合理的ではありません。人間の生きる社会は、死との距離を公平に保つことを理念として努力してきた社会です。病気にしろ、戦争にしろ、貧困にしろ、それを克服しウェルビーイングを追求することこそが、目標とすべき行為であり合理的な配慮にあたることなのです。

これからみなさんが直面する実社会は、大学のように保護された自由はなく、不公平なことばかりです。不公平は外部からは見えにくいものです。そのような不公平な世界において、ひとりひとりが民主主義を行動規範として合理的に行動し、その元にある理念、理論、理屈をしっかりと保持し続けて欲しいと期待しています。

もうひとつは、この新型コロナウイルスが未知の恐ろしい病気で、対応の決定的な方法がまだわからないことが脅威だとされている点です。今の技術では対応ワクチンはじ

きにできるでしょうが、それまでの間は混乱します。昨年は台風被害も大きく予定変更で大変ひどい目に遭いました。近年の自然災害が頻発した世の中は未知のものばかり、未知のものに対応するときに、私たちの都市と社会をどう作り上げていくか。計画は無意味だとか、どうせわからないなら刹那的に場当たりで対応するという投げやりな生活態度や社会づくりはむしろ社会の脅威になります。建設業界でもオリンピック後はなるようになれ、というようなビジョン無き行為が蔓延していることは憂えるべきことです。

いま日本の人口を例にとって未来を考えてみると、戦後、我が国の総人口は増加を続け、1967 年には初めて 1 億人を超えましたが、2008 年の 1 億 2,808 万人をピークにいまや減少する一方です。減少していく社会はたしかに未知の経験です。しかし増え方と減り方の加速度の絶対値は同じくらいで、現在 2020 年の人口はだいたい 1990 年ころと同じ、10 年後は 1980 年ころつまりさらに 10 年前と同じくらいの人口に戻っていくという推計です。（2048 年に 9,913 万人と 1 億人を割り込み、2060 年には 8,674 万人まで減少すると見込まれています。より長期的に見ると、明治時代後半の 1900 年頃から 100 年をかけて増えてきた我が国の人口が、今後 100 年のうちに再び同じ水準に戻るということです。）

これは、未来社会の技術発展はたしかに未知ですが、人口の規模や環境における密度感は、既知の世界だということを教えてくれています。10 年先の 2030 年を知りたかった 1980 年を参考にしろということです。うろたえることなく、落ち着いて既知の世界を見渡せば、糸口となる知識はきっとどこかにあるということです。

みなさんは、本学大学院において、建築・都市という窓を通してこの世界のあり方の研究をしてきました。世界・社会・自然に埋もれている事実を科学的に発掘し、実験や調査から得られるデータとして分析するという研究行為を通じて、世界を認識してきたのが、建築都市文化専攻に学んだ人たちの科学の方法だったはずです。「見えにくいものを見えるようにする」という科学的手法を身につけたみなさんは、きっと未知の世界に対応していく方法を見いだすことができるはずです。悲観・諦観・刹那主義に陥らず、常に科学することを諦めずに実社会で活躍してほしいと思います。

最後に、本日ここを修了していくみなさんが、何よりも健康であり、ウェルビーイングを求め続けられるとともに、これからも横浜国大での研究の体験を活かして不断に学び続け、未来をつくりあげていくことを祈念し、何よりも大きく期待しています。この日この時の私からの祝辞です。

今日は本当におめでとう。